博士論文要旨

論文題名：安岡章太郎研究
――方法としての「弱者」――

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程
アンドウ　ヨウヘイ
安藤　陽平

本博士論文は、安岡章太郎の文学について、「弱者」の方法化という視点から考察するものである。安岡文学は「弱者の文学」であるという説明は、すでに安岡の登場初期からなされてきた。先行研究では、安岡研究は「弱者の文学」の繰り返しに過ぎないという反省がなされ、「弱者」以外の視点を模索することが呼びかけられている。

しかし、安岡の描いた「弱者」には検討すべきことがまだ残されている。本博士論文では特に、「弱者」はどのような存在として描かれているのか、そしてそれを描くことでどのような批評性が生まれているかというふたつの観点を設定し、安岡文学における「弱者」を考察することとした。

第一章では「宿題」を対象とした。尋常小学校を舞台とする本作では、学校教育についてゆけない劣等生の姿が描かれる。その劣等生がどのように誕生したかを描きつつ、その言動にも一定の合理性をもたらしたことで、本作が戦前・戦後にまたがる学校教育への批評たり得ていることを明らかにする。

第二章では『遁走』を対象とした。軍隊内務班の生活に適応できない劣等兵に焦点を当てた作品であるが、しかし作者安岡はこの劣等兵に「希望」を見ていた。安岡がしきりに批判した野間宏の「真空地帯」や、当時の安岡の文学理念を参照しながら、その「希望」について検討してゆく。

第三章では「陰気な愉しみ」を対象とした。本作は、戦後に軍人恩給を受けて生活する傷痍軍人を描いたものであるが、彼は男性としての劣等感を抱く存在である。男らしくあろうとして失敗を重ねてゆく姿を描くこの作品から、同時代の敗戦・占領を語る言説への批評が読み取れることを論じる。

第四章では、「海辺の光景」を対象とした。「痴呆症」を患った母の最期を描いたこの作品

で、見舞いに来た息子は母とうまく接することができずにいる。そこには、息子という立場への過剰なまでの意識が関わっている。その意識がもたらす功罪を描きつつ、そこから解放される方法も示しているのが本作であることを明らかにする。

第五章では、安岡のアメリカ留学を対象とした。留学中の安岡には、敗戦・占領による劣等感に加え、現地での被差別意識が抱かれていた。そうした幾重にも重なる劣等感は、後の安岡の新たな展開を導いてもいったが、他方でそれをモチーフに創作することの問題性が留学記に露見していることを論じる。

第六章では、「月は東に」を対象とした。前作「幕が下りてから」と正続をなす本作では、主人公の未成熟が焦点化されている。しかし本作は、「成熟」を果たそうとしてついに果たせない物語である。そして、むしろそれが失敗してしまう点にこそ批評性が込められていることを明らかにする。

以上六章に加え、補遺として、第三の新人という文壇的枠組みについての検討をおこなった。安岡は同グループを代表する作家に位置づけられてきたが、そのグルーピングの妥当性を批判しつつ、枠組みの起源や、なぜこれほどに流通したのかを検討する。